



俛譜一系集

三



俳詠一葉集附合之部二

古學庵俳号
幻窓 湖中
坎窩 久臧 校 編



貞享元甲子冬

狂句本枯の身六竹高子似たる可氣
たそわとけしる望れ山系花
るのよま水子海屋位とさく
可しらね家をふしふ赤了
新解のふそくすまの白ひあふ
白のろて(平沙平米を 菊
野水 若号 重三 杜樹 正平

ウ
糸虎ハ海ノ子ト云フ事ハ
髪ヲヤサシクモ其ノ小カク
偽レテ〜ト乳を乞フ〜
消ぬ卒都婆子す〜
カケテ〜此曉き〜火を焚く
河〜ハ貧乏〜
田中〜小舟〜
昔子舟ハ〜人ハ〜
〜
味さ〜
二の尼子〜
蝶ハ〜

水 五 玉 弓 水 五 玉 弓 水 五 玉 弓

二
ウ
今了〜
ゆ〜人ハ〜
志〜
望〜
あ〜
鳥〜
あ〜
秋水一斗〜
日東の李白〜
中子〜

水 五 玉 弓 水 五 玉 弓 水 五 玉 弓

三
一の位吊ふそのより終り
箕子飲れ此意をいひしき
赤新のりより星くしく
くすくすいしとのまゆり
疎いし居居り春霞の花満
廊下の影にけしきし

玉 号 水 玉 号 玉 号

中もいし壯事ゆきこをいふ
ゆきけしきし修きし得る
まきしまきし尺る節の食
世もまきし者く世の羽折る
くくくくけしきしなひきし

野水 杜國 玉 号

海より月袖を鞠鞠をいふ
柳をいふまお真徳の富
ゆきゆきいし魚の目輝り
おくまきし丸を只後すふ
床文を解けいしこあし男
縁ききしけしきしなひきし
いしきしと痛をらきし力あふ
ゆきゆきかきしきし首おきし
小之右よりききしきしきし
白をききし丸牡丹めし人
縄あみのかきし破れ蟹あ
くくくくしとのみ地をきし

重玉 玉 号 水 玉 号 玉 号 玉 号 玉 号

初ちの春や嫁仕の先く
禿心くらむ妻をかきゆき
楮葉を解すゆき室のまら
くさひを起上残留も
藤深く楮を榊の華き
三原可くん不破の再人
そすく美濃を赤く其を志
解と先くはさす七十
なかめや法事とまき花
ひし川の傘のいこそく
道徳子孫の子をふたま
まきくまつくす存松を

水 小 号 五 玉 翁 五 水 翁 号 水 小

月子たしる白猫の後のまのれ
志きぬ碓氷山を 水川
秋探れ志きく赤きく静さハ
着の帯つるふ糸を川ら
彼より祝をひきき山可け
ひきくハ興休の扇の由竹可
三々のむ鶴形尾長けを軍
くさみくすむ越の稻俣

号 水 五 翁 五 水 翁 号

杖をひきく山を十
清みくす月をくす霽水
水あみゆくまはりあす

杜園
重五

昌命の業を初狩人のまゝぬひく
水の伊門を井一阿けの喜
う業を掃りしやまのちうすみ
業の留若き一む神をたんと
ら〜しけり物も娘〜つぶ
燈籠も〜り子情〜し家
知分森の角方ら〜をえ〜れ
葉もま〜き一〜道加木の坊
約月夜又とあはれぬ〜
あも買〜り〜き
え〜るの業〜を〜
扇婦の果〜り〜

野水 扇 正年 玉 扇 水 玉 水 扇 玉 水 扇

心静ま〜は浪のありぬれり
佛 咄〜る 魚は〜
鯉も〜も二所と伝われ
玉取〜り〜けの〜け
〜け〜け〜
古屋の〜り〜
窓縁や糸綱の橋の長や水
石反の松を〜り〜
松子の柴薪〜け〜
三十〜り〜
〜り〜
〜り〜

扇 玉 水 扇 玉 水 扇 玉 水 扇 玉 水 扇

あの人を様も指す秋はさん
けしひのふとくちをこもす
三の月の赤きくく鐘の音
秋の虫の音もあはれ
意もよふ念佛もあはれ
あはれよふ念佛もあはれ
あはれよふ念佛もあはれ
あはれよふ念佛もあはれ
あはれよふ念佛もあはれ

五 水 玉 号 水 号 玉 号 水 号 玉 号

難波浦の河

すけ

あはれよふ念佛もあはれ
あはれよふ念佛もあはれ
あはれよふ念佛もあはれ
あはれよふ念佛もあはれ
あはれよふ念佛もあはれ
あはれよふ念佛もあはれ
あはれよふ念佛もあはれ
あはれよふ念佛もあはれ
あはれよふ念佛もあはれ
あはれよふ念佛もあはれ

重三 杜國 野水 羽衣 号 水 玉 号

火をぬ火焼ふふ人を足む
門をのらふし残る可くは世の
血刀をくくくは世のくくは世の
志方下る本郷の種七うみ
そまの種をたぐくあふ
花をば梅の徳とけり
信ものくくは世のくくは世の
白蓋信くぬふくは世のくくは世の
宜者可くくくは世のくくは世の
八十年をくくは世のくくは世の
あふくくは世のくくは世の
石をくくは世のくくは世の

五 号 水 五 号 五 号 五 号 五 号

夢は 袖よりト木くはれ
妹の家を焼く女足し信の
物瓶に葉をばふくは世の
体り末く樹子かきくは世の
つよまる向ふ并茶の
子の日お目を報治の志起
おかくは世のくくは世の
あふくくは世のくくは世の
泥子くくは世のくくは世の
粥すくくは世のくくは世の
物名のかくは世のくくは世の
水の分ふくくは世のくくは世の

五 号 水 五 号 五 号 五 号 五 号

新しき女房をもせむ村向 小

田舎御堂

和歌月や鶯のつくく無ひは
みのおろたれあふれあふら
櫻槍山家の傳説本城下陣
ひふすの牛の培之原れつ
音もあか具足は乃のうたしと
酌とる童景きくにいて
秋の須弥の湯まきいそるに
ややくそれく不二尺ゆの寺
寂とる枝の木のあふる方

若手

翁

重五

杜園

羽笠

野水

翁

号

小

あふりあふりをもとむ風の出
種ねひり志原の女五三
庭子木音化つしひの落衣
久保ふ山橋つし橋足心
麻うらうらふ葉の葉所
江も近く稻糸尾とせを控
余貞むよふハ舞あ
旅名満子首花をあやう
義薬ゆらす木瓜の山
二 骨をもえそまき原をみあう
乞食の義をもとむ志のめ
泥の上尾を更観を拾ひえ

水

笠

号

翁

五

玉

笠

水

翁

号

玉

小

同年臘月十九日

後^二雪^一野の春^一雪の^二白^一
 串^一に^二鯨^一を^二何^一ふ^二
 二百年^一系^一山^一一^一寄^一取^一
 櫻^一の^二種^一ま^二く^一秋^一を^二其^一手^一
 入^一月^一子^一影^一け^一き^一の^二ま^一の^一ま^一
 智^一多^一ふ^一玉^一を^二家^一に^一た^一れ^一ゆ^一
 海^一を^二え^一む^一の^二ま^一の^一ま^一
 一^一掃^一く^一一^一苛^一の^一ま^一
 棋^一の^二工^一丈^一二^一と^一ら^一し^一の^一目^一を^二め^一
 自^一子^一物^一と^一狐^一を^二か^一く^一
 靈^一を^二ほ^一る^一に^一系^一と^一る^一号^一う^一室

菊

桐葉
 東藤
 工山
 紫
 山
 菊
 紫
 菊

華^一表^一と^一け^一し^一る^一松^一の^一入^一口
 笠^一を^二お^一く^一衣^一の^二破^一れ^一つ^一る^一子^一居^一
 秋^一の^二鳥^一の^一人^一の^一ゆ^一
 を^二ら^一の^一種^一の^一候^一に^一月^一澄^一了^一
 を^二れ^一常^一に^一話^一を^二古^一話^一
 を^二く^一も^一石^一の^一扇^一を^二お^一し^一の^一ま^一
 美人^一の^二か^一し^一ら^一お^一む^一路^一を^二
 城^一東^一の^二聲^一を^一お^一き^一を^二懐^一
 生^一海^一角^一の^二ま^一の^一油^一の^一ま^一
 木^一を^二お^一く^一而^一子^一の^一聲^一を^二お^一く^一
 蘇^一子^一の^二骨^一の^一十^一を^二く^一尺^一の^一
 を^二く^一と^一地^一を^二お^一く^一祖^一父^一の^一ま^一

山
 紫
 菊
 山
 紫
 菊
 山
 菊
 紫
 菊

糸子あきし 痛のまし 山
 不二の根と 望見て 百千のう ありし
 宿のゆく 都のしと 山 ありし む
 中の 夢の 鏡を 思ひ 心 ありし 糖の
 名 うら くと 小姓 翁の 戸を 押
 自 約く 妙計 の 心 き 八つ 写る
 根 いそ くと き えて うら くと の 家
 破 れる 具 足 を あり 持つ けり
 手 集 の 勢 子 へ くと け けり くと
 紅 梅 の 色 紙 子 花 の 色 を 紋 けり
 ち けり くと 字 の 永 年 あり けり 伽
 寺 田 の 新 者 名 標 あり けり 木 了

山 翁 山 翁 山 翁 山 翁 山 翁 山 翁

まき 子ら くと す 翁 の 標 あり 山

花 葉 の しき 心 あり けり 秋 の 色 紙
 花 葉 ごと くと 心 の やし けり 山

花 の 頃 あり けり 子 あり 翁 あり けり
 秋 子 あり けり 標 の あり けり 山

山 の 標 あり けり 捨 けり 山 翁 あり けり
 山

山 翁 山 翁 山 翁 山 翁 山 翁 山 翁

まゝ〜子垣おのり路さや
細〜も新え〜可〜内のお
き〜ハ〜あ〜し〜志〜了〜船〜是

叩端
如行
工山

能行と子積〜か〜姓よ〜義の〜を
その〜つ〜れ〜と〜風と〜能〜り〜

木因
箱

貞享二乙丑年

三月廿七又

何と〜を〜し〜凡〜向〜す〜ゆ〜り〜萱〜針

箱

編〜を〜あ〜く〜植〜ゆ〜片〜の
田〜畑〜を〜結〜の〜重〜の〜所〜と〜う〜す
上〜春〜す〜た〜り〜す〜中〜は〜中〜を
月〜く〜ま〜る〜も〜の〜萩〜桐〜の〜^記物〜す〜け〜
酒〜の〜お〜嬢〜の〜さ〜ら〜り〜さ〜ら〜さ
又〜お〜ら〜り〜み〜を〜又〜す〜さ〜つ〜し
琴〜爪〜を〜し〜玉〜神〜の〜く〜く〜ま
髪〜お〜ら〜す〜竹〜皮〜の〜娘〜を〜ら〜く〜
母〜の〜お〜の〜お〜〜〜〜〜〜〜
お〜の〜お〜の〜お〜〜〜〜〜〜〜
お〜の〜お〜の〜お〜〜〜〜〜〜〜
お〜の〜お〜の〜お〜〜〜〜〜〜〜

叩端
桐葉
箱
湯
葉
箱
葉
箱
葉
箱

燈火風をまのふ紅粉如
川激ゆき撃と角に流るけき
令利とく流る新口くくよ
かこまき所の湯水の花久し
二羽打り海をくく楳や
赤よまき女を春おくくく
枕 屏風の終り候くま
中多候し蒲のいろをきさく
之段の舟深川のか
危位やひく杜律を味ひく
花うりくあ竹こまの世ま
くくく半 燈 吹 冬をわひま

紫 瑞 翁 紫 瑞 翁 紫 瑞 翁 紫 瑞 翁 紫 瑞 翁

水汲小使袖ひやうく
有ゆき少枝山を海くくん
ちハ夜空の流るくくく
村向のそき竹くくく
ひく川 兔の瓜 赤くく
望尺ゆき人ハ舞くくく
男やも矢の表をくく
風くくき大寺の秋の七く
海門を流く生鯉の巻
岩盤山岩盤く助くく
あまくく 流るま果河の松

紫 瑞 翁 紫 瑞 翁 紫 瑞 翁 紫 瑞 翁 紫 瑞 翁

同日

つくと枝のあは油いらつ
ひくくまをいつむ鼓の一家
夕氣山神祇の籠をわくま
情多しとすらふる撫抄の月
わくしらきぬまを籠うの神の上
言のたまふに撰多しとほろ
鼻残の初め春ふせけり
そら大波の三井の隠きく
まを徳海の鏡の袖と尺上
おゆゆゆく鴨乳四五百のま
お風のひききし海を飲草

桐葉

菊

叩端

黄口

東蘇

上山

菊

端

山

紫

口

佛一ときさむ西谷の信
鳥羽玉の契きく女着るを
是を天破る新の月の
秋ハ新只者お物くひく
白子のたまふ赤玉方の海
浪うきうる鯨の骨を花裁く
泣わくうた初初のからくまそ
二
望持くまをうたうるやき男
玉守の塔の信くくまくれ
齋館の屋を蜘蛛の困子掛きて
風子あをま置らふの付死
華くくく杯の度あを引挽め

庭

端

菊

山

紫

端

菊

端

杖

端

紫

山

回今多し物見そえさる
おろくくあこれのまゝあり
多うたう君とほろひひ
白うみの陸う船おとさ
おほ人帰喜おみをと占ふ
難艱の東お寺の月満く
猪子の粟此何とまひく
怪筆うまご松林の秋の虫
子家ううううの尾の聲
まふうう物焼く何うか
入りの江乃早二
まき、油さけつる花のたぐ

菰 紫 菰 山 菰 菰 菰 菰 菰 菰

つしおとてんえさる西行

楫

同

牡丹花をよほくさひや、怪のおけ
新月津し、春の玉降
あか袋うみあふおけけ
はくし、船うけいさる
新家根うまぬ板の宙
二百らうひううれ
たぶと引流ハ少あうの男同士
流う、濁う地の人うけ
竹崎のすういふ方のうみ

菰 桐葉 叩端 菰 紫 菰 菰 菰 菰 菰

舞の音くぐりゆく牛の魚
手ふくくききあまの舞の系
からんのうきききききき
くすくすきききききき
祝のくくくききききき
くくくくくききききき
宿吉風をうつく舟のきき
花あききききききき
墓の泥をききききき
出代の橋ききききき
午時のききききき
地雷火ききききき

端紫翁 端紫翁 端紫翁 端紫翁 端紫翁 端紫翁 端紫翁

舞の音くぐりゆく牛の魚
手ふくくききあまの舞の系
からんのうきききききき
くすくすきききききき
祝のくくくききききき
くくくくくききききき
宿吉風をうつく舟のきき
花あききききききき
墓の泥をききききき
出代の橋ききききき
午時のききききき
地雷火ききききき

端紫翁 端紫翁 端紫翁 端紫翁 端紫翁 端紫翁 端紫翁

海さわの枝は度ふ本言
花垣子まうのま紫引枝め
これも角廻まは蝸牛
菊

同

和ふのま木多や四月の板竹
まの杖つく岨のまま
牛の子北乳そのむと紫
かけろふとま竹の海柵
傍つとも栗の穂くつ
ひくくけくまの松
霧のまを渡の天を海魚く
菊

菊

狂糸の信千たを只のす
鼻跡千流を流む女河う
かさけの市上ゆ絶く海
紫くつ歌まのま戸ま
うまをなれきくま
水

同年六月二日未武於小石川無行

清さの流くくくく
まを尺くくく月
松風のまうま崎家けくく
酒店の秋を降子ゆき
社ままうくま考の蝶くく
菊
其角
才丸

清風

菊

嵐雪

其角

才丸

支碎一醒の更子一寢一
瑤のすくみうのくさるる
を一息のほも二羽一
我造る如指の露を指を
きぬくの衣をゆるぎ
のふれはつくの人の
古梵のせうに花也を
ひくくはち強くす
引板を業くすものこ
武吉のものすさまじ
七里は毒の七甲
血之の雷南はあはれ

九高角空扇風壺高九角空扇

槐の小きさく解くす
臨陽那の端をすの飯を建
狂女さくようは法志く
情一うめは黄金の朽
将く味か出羽の餅
空貞のくもつふりう
枯るあつ一のつ
智多れ屋の起脚を
三里とすえす不二
扇をちかう次
まらるる然る小の
陽片とすく椽低く狭

扇風壺高九角空扇風壺高九角空扇

砥水きよむる五郎入是
伴もこは止戸も穰くかくこ
きちるもくし風うほく敷
伊豫すくれ湯柳の敷ハ望し
入院尺あひの長う砂と法
一陽と露正月とやう来
ぬ横よしりうまもや
海屋のあしりおろをぬお
志のふれみしれ瘰もくし
くお孝こくた川竹をくし
名もあし取もくし
后の月あし入射あし

雪角丸高雪角丸高雪角丸高

三
みのはれ狂行つるれもぬも
志をく死くも場中くも
初雪は石山四くし
小女郎小まんと大根曳丁
血もくく起行もくけり
尺よよの母か川ハ西むき
涉ゆりも夜もきくまの影情
汗涼うくし情了
さくくし旅字余く空紫
ふくくしさくく小奴の井山
枝花もそむくく月のまゆり

風角丸高雪角丸高雪角丸高

胸くさくさつらん何のし新
研しつ波取する舟のまきしき
立神の松の岩をいらくら
きれにこす乳人し魂ハおのり乳
麻布の宿覺ははくきけあけ
わらう葉やいかりのきだ籠れそ
又治二重のちりり石も
みよれ髪保るるもいゆるむ
孫年かすふらうらうら
三日月の影西にすくさく
秋ハ月のうらみけたの棟
神心をおつハいかりの神風

角 雲 翁 風 堂 翁 丸 角 雲 翁 風 堂 翁

只一眼も花ハ一す
特のくさきもさすのクマ百言
定家うらうら杖おたすれ
佐く咲もをハまも尺さそ
梅の輪入のほひわ
ひささも強干さるるら
能を惜ぬ不物字き
春あくささひささるる
わらうら提す四方勢し
花梅ハ春を返し人やはさ
さくさくハ真砂水園

角 丸 雲 翁 風 堂 翁 丸 角 雲 翁 風 堂 翁

梅さくら〜きのやあきめすれし
秋葉をみする生ニつるいし

菊
秋風

香さくら〜事息さく枇杷の産地外
笑々〜こ〜山をのむ
りの虫秋洞の音をき〜

秋風
菊
湖春

檀の木れお〜かた〜ぬきうぬ
家す〜去をけ〜ふ〜こ〜

菊
秋風

梅随〜り〜極今何々
まのまけ〜蚕桑〜つ〜
葉の中〜の葉の葉の葉

湖春
菊

か〜さ〜の〜お〜〜
山ハさ〜〜を〜絞〜

菊
子歌

き〜菊〜御のけ
ま〜ま〜ま〜ま〜ま〜ま〜
ま〜ま〜ま〜ま〜ま〜ま〜

菊
知是

とらふ舟の棹さしてかき狂者の体
重し桐の太極中へ赤持と付し附給
大切し

酒の幌子入連の月 二鷹

四白月ふれは終しそその指体は
よめよく折し付る幌は霞をなして
おしむきのききりし

秋の山も木もれろのちん 牛車

秋のちんをえり市も折れくそ
一海をなすたふらうそ秋を
も木のちんみりふらうそ秋を
くそをのちんみりふらうそ

秋のちん大やうと重くそ
又一人を教事し

炭かきりくくくあつこ 秋風

おの山家の体は尺ふし付付る
きとめり山家の炭電を
体もあつこくも炭電の
強し人のきぬを尺付る
里のまきほのちん
附給ふあつこ炭電の
おの山家の体は尺ふし付付る
よくくく付るまき

仙化

糸のちん弱しふおほひきよ 李下

山のうらを甲斐又の代と見よ
松風

静のあつさきよふ川のたけく吟
一き御を形宮一し付物む山歌を
ゆ〜ひ〜

はの古系別髪を埋みまへん
松風

袋の危く物すさまじきを又しあのみ
岩を親〜とて甲斐とてハ古人佛者
の古法おぼほく自然とて昔々と昔の
あ〜とて利髪を留〜至他言新く
ま〜とて欠けり

と〜の〜一此記もすの竹の戸
茅草

あえふ〜まははは若作〜まははは
ゆ〜り

吹のより車かきゆるあこのけ
李のい

あひ陰名の御を〜と〜と〜と〜と
福を結〜と〜と〜と〜と〜と〜と
花入身を目に〜と〜と〜と〜と〜と
白化の初〜と〜と〜と〜と〜と〜と

橋ハ小あをさゆの 湯片
他化

まのまを〜と〜と〜と〜と〜と〜と
う〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
か〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と

跡〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
朱弦

是又まのけ〜と〜と〜と〜と〜と〜と

中れにまき取かして白きかき付く見
おのりうし粒おまむのゆーひふり
かぶりくー

紫糸の風よまの風きくー入

コ腐

まの風切とさく紫糸新ーおのり民家
ーく武士の居若とも子と取ーき物
なと尺付さ付し大形ハ物済なと
も及りーさく白し成ハ中持さく人の
居く小形子入は舟も尺付さく
たぬーさくさくさくさくさくさく
子ハあさくさくさくさくさくさく
とさくさく

か、使とさくさくさくさくさく 狐尻

其角

さくさくさくさくさくさくさく
もく此れ情をぬふけく思ふまに
りい押さくさくさくさくさく

あさくさくさくさくさくさくさく

又鶴

そのおの風はさくさくさくさくさく
さくさくさくさくさくさくさく
尺ゆさくさくさくさくさくさく
子付ゆさくさくさくさく

石の戸櫃箱了の坊子さくさく

斧白

さくさくさくさくさくさくさく
さくさくさくさくさくさくさく
さくさくさくさくさくさくさく

身はたきくく昔はたの山やう礎子
次方の満十市の里芳世の里玉川たきく
附く清茶子使く付るゆきにおはの
源系もく不二月に更科の付付るを富
対はるの形家よりうくたをきといふ事
むいおめより

これ三代の刀一丁 張治 李二

は白浪中の素持し頼るにむ人しゆい
付くく信正の昔ふとむ也と使くうさあり
石の三編がしとる 張治をたきくは
よきうの私守し清き水は清き水に
ひも剣を歩くまにけいしうく一白感持

かふは之代とまをし 於好骨の張治の
名人とまへおし

永保ハ壺とむく松の風 仙化

永保ハその時代をいふんを張治の名人
おはくハ壺とむものし信正とまへ
いふことお白きのもめりやゆの付る是ホ
よく心をけし歌味す

近江の田植美徳子 柳む 朱位

古代の傳し金とまへとまへ 昔とまへ
昔ハ物毎字融くし金とまへ
人しと傳し付る美徳近江はちまへ
こそ田植なるの風はたきく思ふし

さるまゝに新まゝ一草の中は石くわ
うへ安永の心とそ有る一と心念をう
るまゝに

何くやの牧は海をくく子 世角

おひの場をよくまゝにうけり
ゆる武士の体もゆるり
まゝにゆるり
ゆるり

又鶴

船の一まゝにゆるり
たんに附きまゝにゆるり
ゆるり
ゆるり

よきまゝにゆるり
ゆるり
ゆるり
ゆるり
ゆるり
ゆるり
ゆるり
ゆるり

李下

乳の館は秋をくく子
ゆるり
ゆるり
ゆるり

春白

ゆるり
ゆるり
ゆるり
ゆるり

神もいなりし海に秋の萩の香もよみし
ほきもあふ 聖 神より愛もよみ
想風

此方の竹根一向又また遠く物遠く大園の
萩の根もあふしよすする時を聖神
叶も叶を成すくは他世のたまこ是
お年くくわす侍ん

人阿まうと事と物とさうつおひ
揚水

ひり又秀逸と聖の念くくくくくく
大悔々の根よりさひ付く先取を聖
世に叶くひくくくくくくくくくく
かみきくくくくくくくくくくくく
も愛も赤くくくくくくくくくく

酒もいなりし海に秋の萩の香もよみし
洞 朱弦

金山の糸糸の大空にまをよくく
くくくくくくくくくくくくくく

右も道道の位とあけの他世の香もよ
くくくくくくくくくくくくくく

白無子か華くくくくくくくくくく
想くくくくくくくくくくくくく

け玉け武伝もよみし 結くくくく
コ富

玉川やあの一六つおまへ尺く
コ富

はねくくくくくくくくくく
心化

竹うらぶさハ夜かこよハ
南むく葛屋の柳の香さし
親と樓を折屋のつれ
餅化しあらの度おまを折合を
獎子買し秋のころり
唐のうもとのどぬ人もあつた
あきき男のつれおすむ月
蓮の雨枝七里をぬき川つ
行約河内のみをれ川つ
あな米つくとるん河つ
梅ハさうり院くそ閉
二月の蓮葉人もすさあつた

楊水
不卜
久體
松風
為
朱法
不卜
李下
楊水
甘角
色香
こころ

姉すの牛は電ふりの氣
胸のぬれ裁の端を織るの
あまの心ゆくとく昔の菊さし
菱の葉をときつみあつた
木魚のゆらゆらけり
田をやし休むる朝月秋
秋さしあつた長つれ
つれあつた先づあつた
くらあつたんあつた
と度結芳のさつた
あつたハあつたあつた
契情をさつたあつた

芳香
為
松風
久體
李下
楊水
不卜
子香
朱法
仙化
李下
文體

三十一
三十二

経よりみ習ふあやのくくく
 木海ふ笑折り子驚うう
 梅生さ昔ふあひあうう
 村動り石のとも火吹けぬ
 地とく花の伸とま川うう
 伊あまのる内子釣りのつとま
 椿よりきく橋つくく秋
 何長のゆさされつ世やみゆ
 尾すくゆく石ふの火
 江子牡丹十里れまをふく
 和さむ昔うあうゆま
 岩根流すもふ地流をあひすく

芳重
 岸白
 コ音
 咲水
 仙化
 不卜
 李下
 楊水
 文鏡
 子喜
 咲水
 貞角

吹くや三井のころは法法とも
 道ぬ道よりあふ奴千返家
 宿屋をさるす月ハ泣く
 足成の能山よりいふは
 子あし唱る観音の湯名
 舟ゆくつ海みまのく川傳心
 をふくくすの松の志く流る
 宿むくろの七存もあう
 まのくくくく喜そ久ーき

コ音
 仙化
 芳重
 楊水
 貞角
 松風
 咲水
 不卜
 岸白

南直一尺喜しと題す
 久のくやうあはしく幼を夜

旅あゝ友をささるゝいこす喜
か終ハるう極の葦掃墨く
よしとひきる一瓢の酒
月ふれく燈火をふ海の上
吹の塵千一吹阿きのおと
牛嶋千給持とく洞折く係
宿位阿くくく美女百々き
提灯千大蠟燭の言りく
出あるくいす字の材木
吾くくハ舞ふ是めく奇の宿戸
行くく阿く後言也えし
仇人のあきけりく氏を於

扇 其角 嵐雪 扇 末 角 末 角 末 角 末 扇

けり付くく業事の
峰へ送る八重山もく火の影
軍の加減くとき長おひ
古作に心くくぬ月も
踊生くうけく極東の帳合
面従心協を借くけりく
小姓はゆく葬礼の中
丁度もくくくく木杖袋
あゝものくくく次戸の塩蘇
表まきくくかくくの対き
けらくくやきく竹の文け
宴かきく夜食すめくおほえ

末 角 末 扇 角 末 扇 末 角 末 扇

毛體と——きと画のと——
 こらめら底のふり十景 家
 りそめり時そ 醉さるの 月
 きうくはひいしほろのふりけふふ
 草にくちしき骨の體は也
 つ川とてもふ部の護戸の片燈子
 四の節と息子そとそ家の子
 鼻つとむむ金よりそいの生 看
 けとらつちまけぬるそりけりきハ
 縄きれり架本そつる花もらふ
 此ふとそ葉のそけりそ長まき

角 翁 末 角 空 末 翁 空 角 翁

三月廿日

是又そ七口都也つ物もここれ
 慣る性おわらる 細梅 清風
 足徳本をまきつお代——
 宋一非をそとつ 算の戸 善長
 名有を 隣ハ之病つこ字 林 二齋
 杖尺とこ——き 柳の葉を 荊 其角
 墨名そくハ虫おかつるそ
 肉おれハ向さつ川のあつらう
 既子立付の使の使のそく
 一表の夢り 踏らけりそ
 松のそり 虫足んといふ其ハ 角

角 翁 衣 白 風 其角 二齋 善長 清風 善白

角

生々控ふ女ありしもの
影かこらし女敵を去りあり女
とく餅をわき山寺
雪を拵控やささるにありし
紅の付しめハリス白のあり
沈みしハ澄泉をささる有るし
三由く麻女らしハ夫を戻
いさしと年子童所を物さしき
男ありし其白粉をぬれ
膝裂し明の風鈴を忘れさる
ふさし折し牡丹花つ
耳しと妹告る鄭云

風 良 富 白 角 翁
翁 富 角 風 白 翁
翁 富 角 風 白 翁

泣き多し美波うき屋をさし
札焼て刀さうハ侍く
系らつ髪をも属れお拳
楯取葉狂舞やさしとみさし
空の月夜ハさそをさし
物さし物やお人のさし
眉如く袖の翠葉をさし
倉のさみうたぬもさし
葱のさし山さし
雲さし蓬屋に控し
何やとさしと控焼ぬ
おまお裁さし花さし

風 良 富 白 角 翁
翁 富 角 風 白 翁
翁 富 角 風 白 翁

車と下く喜の体く心 白

和漢

破風口より新や弱くみすみ

篇

蕙葉蠅避烟

事

合歡醒馬上

事

かきあし少回めな落きと

事

月代見金氣

事

露路繁添玉迹

事

弦地物古きくく強の弁

事

帷を在古きくく切り休

事

碧篋 驅偷氣

事

古き切り強くお魂 至 篇

是くく如首くく是く 極の撥

乳くく心係り何と見く

舟鐘 風早浦

事

鐘 絶日高川

事

鳥くくく子母の境くくく

事

食ハすくけぬ炊き火のけ

事

託教 三社本

事

韻使 五車填

事

花月 丈山閑

事

薄も杖つくむのくく

事

剪銀 鮎一寸

事

四十一

箕面の海やまを山勢くん
 勢りりし海の証をうわうし
 風 飢 喉 早 乾
 ち〜れつゝ黍の葉はゆく秋まで
 肉を炊くとさう庵の夕月
 霧 離 顔 孰 眞
 露 浦 月 潜 音
 ぬ〜んえそをねし似るまのや
 山 伏 山 平 地
 門 番 門 小 天
 鷓 鶴 窺 水 鉢
 霜 壺 霜 壺 霜 壺 壺 壺 壺

ちの〜〜〜
 かくはふ初瀬の音其を花をえく
 臨 谷 伴 蛙 仙
 壺 壺 壺

城 崎 の 壺 を う〜〜 為 する 用
 海 音 う〜〜 芦 の 穂 の 上
 壺 の お け 種 を 隔 る 松 の み へ
 壺 へ 入 り 入 り 入 り 入 り 入 り
 入 自 り 存 疑 の 武 者 の 心
 葉 の 笑 へ 竹 葉 を 何 や とも
 山 寺 の 壺 を 狐 の さ ぐ ら の 庵 へ
 壺 壺 壺 壺 壺 壺 壺 壺

花より草やと酒造りし
 みのまじりにかきぬ 菊のま
 志らまの枝の垣をて花こそ
 縮張を標の柱を断つて
 みとれ 髪を垂るかんざし
 細くもふ取尺のつみきり
 何と焚火とこれ書 けり
 構の力いふつのもむく 信やもて
 岩はふさぐ 志の蓋いけ
 木念の木の 礎や争ぬらん
 四十雀 けり 風もあつり ぬ
 嵐雪 意 若 沾 翁 若 沾 翁 沾 翁

四十雀 二

幸とやあやの乳ハ星月秋
 草 紅梅をたむ ぬ ぬ 残
 妻もを原そのまおゆ けり
 山より尺のさる 夕の枝の所
 ひく 只あをとおそく 写子川
 故きをすちす 秋のきりり
 有ゆすくまへ 鶴の刻みよ
 帆を八合り 棹 郎の舟
 其角 今我 若翁 松海 船棠 横儿 仙化

古地や煙飛くむあのみ
 篇

四十雀 二

昔のころの情をうける 松の葉 其角

清きぬきやゆきぬき 菊の友 素堂

葛の葉ふく秋をよの國 菊 菊

能くく花の目くらむる 菊 菊園

貞享四丁卯

松の葉をよめる 菊の葉をよめる

きんぎょをよめる

時を秋にゆきぬき 松のつと 菊

花をよめる 松のつと 菊

山をけり 菊の葉をよめる 松の葉をよめる 菊

武若神のつと 甲川のあ 菊

松の葉をよめる 松の葉をよめる 菊

かきつばたの葉をよめる 松の葉をよめる 菊

あまのつと 神山の氏 菊

松の葉をよめる 松の葉をよめる 菊

松の葉をよめる 松の葉をよめる 菊

行尽く 五天むの松の葉をよめる 菊

松の葉をよめる 松の葉をよめる 菊

松の葉をよめる 松の葉をよめる 菊

松の葉をよめる 松の葉をよめる 菊

松の葉をよめる 松の葉をよめる 菊

松の葉をよめる 松の葉をよめる 菊

四十四

月清く白雨 洗ふみすれ 楳 沾蓬
 言をつらふく 鯉くくく ける 其角
 花咲く人し しまあつ子 の 尾 赤尾翁
 歌板 珍ふ山 吹の け 沾翁
 作徳海や けららの 岐の 喜まえて 赤尾沾
 聲 せくくく くる 均く ぞ 沾法
 桶の 徳を 系又 集を 古 終く 翁
 舟より けくく くる 毒の きく とき 赤尾翁
 物うけ 八思の やすく 月を くれ 沾翁
 琴を せす くる ねの けさう かな 沾蓬
 下をい くる 神 殿を かい くる 秋の ちか 赤尾翁
 丸 梅 枝を けく 尾と くる けき 赤尾沾

風の 音を せく くる 龍 珠の けく くる 沾蓬
 大口 毛く くる 夜の 音を せく くる 翁
 くく くる 鳩の ちれを せく くる 赤尾沾
 ひく くる すく くる けく くる 赤尾沾
 一物 の 徳を 念の 集を 勝く くる 赤尾翁
 けく くる 龍の ちれを せく くる 赤尾沾
 頭を けく くる 龍の ちれを せく くる 赤尾沾
 頭を けく くる 龍の ちれを せく くる 赤尾沾
 龍 織 着の けく くる 赤尾沾
 物 の けく くる 赤尾沾

同

江戸さうじ心かきんんん時
 巖窟のまきうんんん月
 貝ひらひらしゆんんん行
 酔くハ人々肩うんんんく
 うんんんんんんんんんんん
 根松苗秋暎のうんんんん
 池の穂こくくくくぬんんん
 みおと入帆のうんんんん
 奇の中を画のうんんんん
 妹りかーられんんんんん
 社念くう袋のまれんんん
 鳥をとんまきくんんんん

子 子 子 子 子 子 子 子 子 子 子

江戸のまねまねんんんん
 二瓶とんんんんんんん
 一巻のまねまねんんんん
 苗代のうんんんんんん
 徳島のまねまねんんんん
 秋五下うんんんんんん

子 子 子 子 子 子

同

江戸の人々うんんんん
 曙のまねまねんんんん
 寺のまねまねんんんん
 火をたく舟のまねまねん

子 子 子 子

つらこく松柳もいづれお役の月
かきしにあらんすき一あし
左カ持る幸の如くしあおむ
東の翠の庵にほくむ珠の
かきあつ友引の髪芽朽す
うけしと銀手いかに指を
様うと枕すそくろ御
御香合のひまこらきる夜
妙長川のあつれを軸のまふらん
秋のまうする市原のわら
船の鳴り方す杖つくと百
舟を給あす月丸際きぬ

松風 二齋 子 化 角 風 角 子 化 角 子 文 子

花のつをえ八の長とうつり
柳すあつと一むの 醉
おろすみ愛若を流す舟へ
詞のうみと結す涙を乞
ね高や雲屋の度と酒を飲
心ハ媚すいくとをの旅
四の対をそめくさのさし
る他いけけ納豆きる音
片里おる屋敷の鳥子角入
佇坐のさしと子籠首
美濃のや蛤舟のおよん
あつれす破る切露あけ

本二 風 角 子 化 角 子 文 子

四十一
六

四十一
六

月入る電 秋の暮すこく
下りの勢を荷ふ 焚 米
塚のふ母室のあゝ秋の夜
邦をも軍をうゝゆゑに
花のたぐさゝつゝ 種くむ
すゝ 紺きゆゝす 目白き

子 角 高 化 下

十月十一日 飯子會

故人の系名をよむ 秋時白
まゝの山をたもて 宿く
能 鶴の心屋に 夢のため
糧をふゝる 山うけの 朝

篇 田之 其角 松風

かけゆゝ 芝生のふれみ
新しき 秋の月を 舞とや
才の秋画工一巻 得りし
鮎て 送る 海 船
津 壇や次舟の けさ 波の
歌 舟を 舟末の 舟 松
漁 釣り 舟に 女達の 舟に
舟 舟の 舟を 舟に 舟に
鮎 舟の 舟を 舟に 舟に
舟 舟の 舟を 舟に 舟に
舟 舟の 舟を 舟に 舟に
舟 舟の 舟を 舟に 舟に

又鱈 仙化 魚兜 欽水 全峰 舟雪 執筆 篇 之 角 風 鮎

芭蕉翁不使了して止め

芭蕉翁の芭蕉翁不使了して止め

芭蕉翁の芭蕉翁不使了して止め

芭蕉翁の芭蕉翁不使了して止め

芭蕉翁の芭蕉翁不使了して止め

芭蕉翁の芭蕉翁不使了して止め

芭蕉翁の芭蕉翁不使了して止め

芭蕉翁の芭蕉翁不使了して止め

芭蕉翁の芭蕉翁不使了して止め

芭蕉翁の芭蕉翁不使了して止め

芭蕉翁の芭蕉翁不使了して止め

芭蕉翁の芭蕉翁不使了して止め

芭蕉翁の芭蕉翁不使了して止め

芭蕉翁の芭蕉翁不使了して止め

芭蕉翁の芭蕉翁不使了して止め

芭蕉翁の芭蕉翁不使了して止め

芭蕉翁の芭蕉翁不使了して止め

芭蕉翁の芭蕉翁不使了して止め

芭蕉翁の芭蕉翁不使了して止め

芭蕉翁の芭蕉翁不使了して止め

芭蕉翁の芭蕉翁不使了して止め

芭蕉翁の芭蕉翁不使了して止め

芭蕉翁の芭蕉翁不使了して止め

芭蕉翁の芭蕉翁不使了して止め

芭蕉翁の芭蕉翁不使了して止め

芭蕉翁の芭蕉翁不使了して止め

芭蕉翁の芭蕉翁不使了して止め

芭蕉翁の芭蕉翁不使了して止め

芭蕉翁の芭蕉翁不使了して止め

芭蕉翁の芭蕉翁不使了して止め

芭蕉翁の芭蕉翁不使了して止め

芭蕉翁の芭蕉翁不使了して止め

翁

業言

知足

如風

安信

自咲

重辰

俊

咲

翁

足

寧

翁

風

行

足

足

行

足

翁

咲

翁

翁

翁

翁

翁

翁

翁

翁

翅とあふ存一化うん
 新ふる飛を新ををゆくきく
 三度印しる勅のかくけ
 山方のちり削る木を露の
 煙あししる暮ららるる
 流津瀬子おとまふはの勢あじ
 歌くくしるきり子あし
 原破る月ハむの勢あし
 光みお娘のしらもあし
 子守りし楯の枝の志けり
 陣の仮座り其を他は
 山きしに横をく子あし

足 足 足 足 足 足 足 足 足 足

音をばしけりめん時をさけ
 花差文を集る力とらるる
 山煙うくく作垣の極

足 足 足 足 足 足 足 足 足 足

足をけりあしをけり
 凍あふふ千捨るれぬ若
 松風を吹る白向のまきき
 朝白きみおしるあし
 鳥居く舟押るの秋のそけ
 山の端の月死一君
 きぬくや鳥居の夏あし

越人 聽處 野水 若子 危洞 足 足 足 足 足 足 足 足 足 足

五
 十
 二

五
 十
 二

肩をくちぎるも物さういれ女
家もふいりともあけのあうみ
干飯のふあはははるふとす
見し来りる布の苦なる屋の
涙しつゝと融かぬは
門法の新尺了人のあうり
笑う雨もさう唯の輪妻
能くはに雨さうはの礎
夜のめもさうと輝つてさう月
了あしと律儀さうの待れつ
唯しもさうと切る黄も
尼寺のさうもさうと志と

舟泉 瓶年 洞碧 水子 翁人 泉洞 碧

物瓶さけきハあはとさ
夕のほの輝さうとつて人さよ
布杭ニ本さうとさうさ
ひらけは妹をさうとさう
食さうとさうとさうと
旅さのゆをさうとさうと
さうとさうとさうと
やのさうとさうとさうと
ほさうとさうとさうと
月さのさうとさうとさうと
物さうとさうとさうと
は橋をさうとさうとさうと

泉 翁 人 洞 水 泉 碧 翁 人 泉

山に雲はみよしのけし
多梨元は油のしるし
角の角の化装いす
中川七月の文とく
新しぬき
冠の冠
庶子
式
保
椋
皇
御

是 嘆 扇 展 風 是 信 風 之 扇 此 是

すきまの
新
何
氏
驚
田
か

執 筆 行 風 之 嘆 展 扇

十一月廿四日
御
鹿
石

扇 桐葉

村(一) 松かき音の風止す
糸鳩 陽の山のまけり
種と花の自をなす言のい
常一すもく介一原さの
肌をくみくぬ程をくみ
こほりて整のくろき強力
的わらう種めまむねい
破れ一玉水境もく
古柳子いさるさる麦
物少をくや地をく
木のく食をいゆく秋の
書とく一れあをく

葉 葉 葉 葉 葉 葉 葉 葉 葉 葉

就中 鳴の響了ゆめ
浪泉のあえ了人もさ
成塚の女は志はあを
洋位 影を映つて
新巻のくを結く徳の
ゆりしつて坂の糸掛
糸掛の一里の河原を
ゆりしつて川を新の
幼雲いく度之けり
物志をくまをく
能くくく結くを
湖より岩はか

葉 葉 葉 葉 葉 葉 葉 葉 葉 葉

おゆらむ松千も似るをさし
りりりの聲は尻尾も
秋山の外籠を告ぐあらしに
そ一筋をかりかゝる萱
優優寒の湯廟つゝむる文讀
首人起す夜にゆき
恋葉千ぬれ葉いさよ雨由香
の桶の傍に留まるるあふ
石の下の葉をさすもあふ
春の秋千はくみあふ

菫 菫 菫 菫 菫 菫

五
十
七

玲々——や若葉の頃か菫 如風
情士の葉とまぢる 菫 菫
ゆきの志はくくくくくくくく
跡を破りくくくくくくくく
矢中此ありほそ長き葉の
あ——こはすくたては葉
家のまじりかゝの家達
きりきりけりけりけりけり
木陰様とそぬゆきゆきゆき
くくくん佛のめそりらうつく
きくくくくくくくくくくく
放りくくくくくくくくく

菫 菫 菫 菫 菫 菫

五
十
七

みよれー 登天の汗ぬらひたつ
おしきり又もけりるをのしきり
乳とのおるおきり似し
麻布を襟のほかに織りぬる
菅さとりと火ハねるにけりき
又立の先子ゆゆの膏の膏
るもゆりぬらひ除の膏
小男麻の膏を袖に付るを
花のゆりゆらぬとけりぬ
木うーにけりけりるを二二三
とけりけりけりけりけりけり

菊 丹 人 竹 号 碧 号 碧

餞別

時西(に)程かき言ん字の院
火焼の葉子 袋をつく人
松風よきれりる物をも足ぬる
朝香ハとくきほの山お月
後山ハとくきほの山お月
葛の縄面をゆりぬる
餅ニとくきほの山お月
石 菊 丹 人 竹 号 碧 号 碧

岸白

菊 丹 人 竹 号 碧 号 碧

六十一

六十一

同

志らうのりや 燈をとりそよの木の蔭
一羽わううし 子も一も花
枯るのりいふし 松のみとく
田中のそは通うそゆく
月わそくわのちか 敷
秋風上り 門の半 敷
春の糸端を通り 橋の音
雨のハスきし 馬車のきき 縁
松林女ゆき けえく
雲情うけをかこし 暁

松江

菊

曾良

依

泥芹

水萍

風泉

夕角

苔翠

桃華

下りの秋風 雨の脚のふりそよ
さうぬりむし 池の月とん せき
危をけり

風濤

菊

一品

翠花

虚洞

深川ハすみ色 吹波も煙分りれ
生れはさくけり 池の河 流
初雷のけしめ 杜市の白和えく
初とく 月の初 ねうみ 子
牛車系おろ ちあれそ安む
介のふも 母ふふ 富う 冷き
香きし けり みる ねの 音

菊

其角

六十二

いふしつちをさるる月夜

嵐雪

樹をよる平たけあつたあ
秋もくたへるるささけ
月とんとはひよのほろお

松江

菊

曾良

さき秋菊かた一人をたひ三はあ
越え片せしるるれは侍良古時を
志し浪うするはをほりひ年
あつたひ松をさるる
焼食やいふ古のちをうら

和見

砂をくろくし一葉のり
松をぬく力子果るまのり
い川の急流のゆけり
脚の中うまのり
くもりをかきし

菊

越人

足

菊

人

空照危子松

越人

玉葉や更なり松もさるる
空をさるるあつた松
海士の子の能をもさるる
明戸より直なり
あつたせんは名月を

和見

菊

人

足

麦の穂をよよや陸家やをよけり
みもをさうりに山景 嘆こ
登の山 登りおわの福とて
杜重 野人

翁

杜重

いさくらハもえり 終小 雲や
硯のうらね 舟 船 起

翁

左見

同 一 葉の情 一 ぬい 香も 舟
三十 鮮 手 一 此 魚 あり
阿比 山の 阿う 一 八 舟の 浦 云 ち
かや 釣 せ け ぬ やり し け け

故江

野人

支那

美の心 一 一 一 美の 枕 一 舟
あ 一 一 一 ぬ 子 船 の 舟

翁

起例

から 一 一 一 枝 雲 坂 一 雲 一 舟
角 の 一 一 一 勢 舟 一 舟 一 舟

翁

去勢

貞享五年戊辰年

翁

何の本 舟 一 一 一 舟 舟 舟
舟 一 一 一 舟 舟 舟 舟
舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟
舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟

又云

又云

二葉のすくはれし母をさくら
まのりの子をまきぬ引つみ
初と先ハ長き枝のゆり火
灼けし流のかよふ方
門はと先なる回の中は古
山はまゝにほゑまされし袖の汗
たふしをさしたるのむかし
女のみ古き御館の破す
櫓を射つてよるは音
ゆかりにほゑくくは物心
陣の仮面を信の氣
白きすのりたをた

平庵 勝延 清里 光 翁 危 翁 色 野人 光 里

はめをえたる玉は袖
もる肉を結、襟織を
きりきりし指の
袂は、信れ末のほ
返りつらきわの
急種とほのやめ
も終は追手起
たてに吸か
後りしもの
ゆりうし、樂の
約の王子は
あまのき

危 翁 光 翁 危 翁 色 野人 光 里

天
十
六

六
十
五

梅子の橋のかけつゝ一尺
愚癡を手中に握りて夢の儘
かくきは又の袖に袖もよ
際りの束ハるゝ手もよ
一里まゝしあふ青月結一の葉
あやもをよこせしむく山陰の
かきうゝ東風のくまもきのみも
暖れやハもやくとかゝるゝ梅
二
傍義すすみゝる橋のくまも
とさみめていさふと橋の汗拭い
非人とおそしむらゝるゝ
後らぬゝひらゝる羽おのゝ一ツ紋

水 翁 紫 庭 行 端 楫 山 扇 紫 翁 水

五寸と書く一寸のを
空梅は庭のく橋のくまの白心
やうゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
又ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
何とやゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
古是れ石のそゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝの杖をいゝゝゝゝゝ
お十二ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
不浄をよけり金綱の法
智やゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
おさゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
山陰の花と古版戸の秘苑せん

行 山 庭 翁 紫 水 端 楫 山 扇 紫 翁 水

山陰の秘苑

山陰の秘苑

邪まがしとわしとあつく

楫

六十九

蓋子おほしもあつる者のたひり
麦種あひらもあつるの末
二一いとまする鳥あつたれた
ういとつ袖もも折しる名もも
伝つたれて有ある所の傳つつ
それとけつつの種もも
於おつとあつる耳もも
念お力ももあつる
そのまの松もも一唱もも

箱
知是
桐葉
叩端
葉言
自嘆
如風
雲程
重辰

長若おほの雲もも
岸ももあつる八百もも
森ももあつる
子ももあつる
そ花ももあつる
猶ももあつる
始ももあつる
二
急ももあつる
天ももあつる

飛
足
紫
端
辰
足
風
葉
言
端
翁
作

六十九

よむれ風の字 雨は 七言
葉子しんぞと本流きてのしほらう
長玉の外面を名 初くひ 足 嘆 風

同六月十九日

蓮池の井の屋のむきしんぞう
まねもしんぞくとゆらかの子
さしみやみん火しんぞう待り
肝のつらし 肝の大きき
菊並みそつり人の通の海
庵や小窓の屋ハさしんぞう
去路よく 烟ハさしんぞうと
芭蕉 芭蕉 芭蕉 芭蕉
越人 越人 越人 越人
怪然 怪然 怪然 怪然
炊玉 炊玉 炊玉 炊玉
舌替 舌替 舌替 舌替

芭蕉

橙しんぞう 岬の風のしんぞう
古きお瓦をよと 軒のしんぞう
夜しんぞう くらき 燈人の 雲
流しんぞう 雨のしんぞう 雲のしんぞう
すの 雲しんぞう 舟のしんぞう
次すの 雲しんぞう 舟のしんぞう
子ゆしんぞう 雲のしんぞう
着生の 雲しんぞう 舟のしんぞう
雲のしんぞう 舟のしんぞう
足跡の 雲しんぞう 舟のしんぞう
つらけの 雲しんぞう 舟のしんぞう
秋の 雲しんぞう 舟のしんぞう

芭蕉 芭蕉 芭蕉 芭蕉
己百 己百 己百 己百
梅樹 梅樹 梅樹 梅樹
古路 古路 古路 古路
臨步 臨步 臨步 臨步
捨茶 捨茶 捨茶 捨茶
用足 用足 用足 用足
東巡 東巡 東巡 東巡
了洞 了洞 了洞 了洞
人 人 人 人
文 文 文 文
号 号 号 号

そのまもつけく 藤かゝす
花さうく 名白も 字 等 一 々
傍のめし 子 待 可 也 也 也
言 程 子 霜 等 一 一 一 一 一
跳 け け 一 鞠 子 名 名 名 名 名
み 一 一 一 一 一 一 一 一 一
奇 留 一 一 一 一 一 一 一 一
一 一 一 一 一 一 一 一 一
も 一 一 一 一 一 一 一 一 一
一 一 一 一 一 一 一 一 一

然 玉 枝 餅 百 翁 呂 系 歩 巡 文

新 中 一 一 一 一 一 一 一 一
新 中 一 一 一 一 一 一 一 一
名 一 一 一 一 一 一 一 一
時 一 一 一 一 一 一 一 一
一 一 一 一 一 一 一 一
一 一 一 一 一 一 一 一
一 一 一 一 一 一 一 一
一 一 一 一 一 一 一 一
一 一 一 一 一 一 一 一
一 一 一 一 一 一 一 一
一 一 一 一 一 一 一 一
一 一 一 一 一 一 一 一

然 人 翁 玉 百 呂 京 巡 笠 文 然

は—軍安のうらわらるる及橋
去るうらわらるる松の干のせせ貝
風心おもふあつきのうらわらるる
ゆづりゆづりゆづりゆづりゆづり
本松のうらわらるる松の干のせせ
橋のうらわらるる松の干のせせ

出 橋 人 橋 橋 橋

七月十三日 望月 望月

細秋や海も喜田の一みと全
のうらわらるる松の干のせせ
行府 喜田のうらわらるる松の干のせせ

重 辰 知 足

獲るる 蕨は 折まらるる
松のうらわらるる松の干のせせ
望月ゆづりゆづりゆづりゆづり
白面のうらわらるる松の干のせせ
田面ゆづりゆづりゆづりゆづり
お氣まわらるる松の干のせせ
お氣まわらるる松の干のせせ
松のうらわらるる松の干のせせ
松のうらわらるる松の干のせせ
松のうらわらるる松の干のせせ
松のうらわらるる松の干のせせ
松のうらわらるる松の干のせせ
松のうらわらるる松の干のせせ
松のうらわらるる松の干のせせ

如 風 安 辰 自 吹 風 足 風 吹 風 橋 橋 橋 橋

きこまくなまぬに色もあつて
ふとこけ子指さし指す又あつ
戸をせめてあつてあつて
早頃の物をあつたあつた
嫁とぬ娘の肩うすうす
まのひますすうすあつてあつて
瑞きやきまつ松のよもあつて
あつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつて

人及号篇浮及人篇浮

元禄元 九月廿九

いふ(の)と(の)自由の家
松のひまをまつ松の
ま丸うすのあつてあつて
そのあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつて

叩端 桐葉 翁 東嶽 工山 閑水 紫 菊 友

山 紫 水 山 水 山 紫 水 山
山 紫 水 山 水 山 紫 水 山
山 紫 水 山 水 山 紫 水 山
山 紫 水 山 水 山 紫 水 山
山 紫 水 山 水 山 紫 水 山
山 紫 水 山 水 山 紫 水 山
山 紫 水 山 水 山 紫 水 山
山 紫 水 山 水 山 紫 水 山
山 紫 水 山 水 山 紫 水 山
山 紫 水 山 水 山 紫 水 山

山 紫 水 山 水 山 紫 水 山
山 紫 水 山 水 山 紫 水 山
山 紫 水 山 水 山 紫 水 山
山 紫 水 山 水 山 紫 水 山
山 紫 水 山 水 山 紫 水 山
山 紫 水 山 水 山 紫 水 山
山 紫 水 山 水 山 紫 水 山
山 紫 水 山 水 山 紫 水 山
山 紫 水 山 水 山 紫 水 山
山 紫 水 山 水 山 紫 水 山

山 紫 水 山 水 山 紫 水 山

山 紫 水 山 水 山 紫 水 山

ねまうし 漆葉 垣の 旅 菅翠
 時君と名をいふ 牛の 寄る 翁
 中川に 伝名ゆい りは 習ひ 友五
 南より 寄る 子 寄る 子 寄る 子 寄る 子
 とも 寄る 子 寄る 子 寄る 子 寄る 子
 折る 子 寄る 子 寄る 子 寄る 子 寄る 子
 女房 子 寄る 子 寄る 子 寄る 子 寄る 子
 就身と 物 寄る 子 寄る 子 寄る 子 寄る 子
 痛 寄る 子 寄る 子 寄る 子 寄る 子 寄る 子
 まる 子 寄る 子 寄る 子 寄る 子 寄る 子
 さ 寄る 子 寄る 子 寄る 子 寄る 子 寄る 子
 秋風 寄る 子 寄る 子 寄る 子 寄る 子 寄る 子

昔の 危は あら 寄る 子 寄る 子 寄る 子
 り 寄る 子 寄る 子 寄る 子 寄る 子 寄る 子
 仲子 寄る 子 寄る 子 寄る 子 寄る 子 寄る 子
 唐人の 話 寄る 子 寄る 子 寄る 子 寄る 子
 破る 子 寄る 子 寄る 子 寄る 子 寄る 子

涼川の 旅 越人
 酒 寄る 子 寄る 子 寄る 子 寄る 子 寄る 子
 着る 子 寄る 子 寄る 子 寄る 子 寄る 子 寄る 子
 理 寄る 子 寄る 子 寄る 子 寄る 子 寄る 子 寄る 子
 蘇 寄る 子 寄る 子 寄る 子 寄る 子 寄る 子 寄る 子

三
 十
 八

風子 吹花 帰 市人
何よりと長安へこれ名利の地
醫のおちや丁々のゆるゆる
いそいそと海老の穴をむく
ひそひそはやく寺の法
は里より古ふ言葉のなを傳へ
足跡さるせぬ 市のゆけの
きぬくやあまのくさくさ
風ひよりのあまの
またつとまの昼の海邊をさる
物強くさる舟はあまの
月と色は言の字根をさる

人 人 人 人 人 人 人 人

さる存 帰 市人の風
破れ戸の新あけのま
尺巻はさるきまの挽割
匣あまの腹紗をさる
物さるの糸の糸の
人さるの糸の糸の
初瀬の糸の糸の
おまの糸の糸の
垣筋の糸の糸の
あまの糸の糸の
ゆくの糸の糸の

人 人 人 人 人 人 人 人

七十一

七十一

花子(由と)はあや(一) 舟
秋止(一)り(一)山(一)級(一)お(一)の(一)あ(一)
こ(一)あ(一)人(一)と(一)あ(一)く(一)こ(一)け(一)一(一)林(一)の(一)本(一)
あ(一)ら(一)れ(一)た(一)あ(一)ら(一)の(一)あ(一)ら(一)の(一)あ(一)ら(一)の(一)あ(一)
心(一)と(一)け(一)一(一)り(一)入(一)る(一)か(一)ら(一)れ(一)あ(一)
て(一)入(一)る(一)あ(一)ら(一)の(一)あ(一)ら(一)の(一)あ(一)ら(一)の(一)あ(一)
あ(一)ら(一)の(一)あ(一)ら(一)の(一)あ(一)ら(一)の(一)あ(一)ら(一)の(一)あ(一)
舟(一)を(一)浮(一)女(一)体(一)を(一)一(一)路(一)一(一)り(一)
了(一)る(一)あ(一)ら(一)の(一)あ(一)ら(一)の(一)あ(一)ら(一)の(一)あ(一)
花(一)子(一)舞(一)二(一)男(一)子(一)名(一)余(一)漢(一)と(一)ん
あ(一)ら(一)の(一)あ(一)ら(一)の(一)あ(一)ら(一)の(一)あ(一)ら(一)の(一)あ(一)

菊 五 通 良 菊 通 五 菊 水 五 通

あ(一)ら(一)の(一)あ(一)ら(一)の(一)あ(一)ら(一)の(一)あ(一)ら(一)の(一)あ(一)
き(一)ら(一)の(一)あ(一)ら(一)の(一)あ(一)ら(一)の(一)あ(一)ら(一)の(一)あ(一)
何(一)れ(一)め(一)と(一)あ(一)ら(一)の(一)あ(一)ら(一)の(一)あ(一)ら(一)の(一)あ(一)
あ(一)ら(一)の(一)あ(一)ら(一)の(一)あ(一)ら(一)の(一)あ(一)ら(一)の(一)あ(一)
あ(一)ら(一)の(一)あ(一)ら(一)の(一)あ(一)ら(一)の(一)あ(一)ら(一)の(一)あ(一)
一(一)里(一)を(一)一(一)里(一)を(一)一(一)里(一)を(一)一(一)里(一)を(一)
尺(一)を(一)一(一)尺(一)を(一)一(一)尺(一)を(一)一(一)尺(一)を(一)
か(一)ら(一)け(一)る(一)あ(一)ら(一)の(一)あ(一)ら(一)の(一)あ(一)ら(一)の(一)あ(一)
あ(一)ら(一)の(一)あ(一)ら(一)の(一)あ(一)ら(一)の(一)あ(一)ら(一)の(一)あ(一)
あ(一)ら(一)の(一)あ(一)ら(一)の(一)あ(一)ら(一)の(一)あ(一)ら(一)の(一)あ(一)

袋水
菊 通 菊 水 五 通 良 菊 通 五 菊 水 五 通

カもらすらむくく一億
故されく和らむ牛の夕涼
法より一降る秋の稲妻
あけの傍をおよぶ海の月
清らけりむ碑の塔の影
吾生を朽木の花を植えて
まの世の母をなごころん
館食はまをわくく多敷の里
神火替折く花かたし
母のまは冠とややん毒あらし
丸輪ハ有くま石の塔
一かみの和くくはと吹界

五良五竹涼通良洞波水五篇

むくろくくくもあやみ月
秋空くゆく花と輪ふ法のかく
寂く氣をまけりあけを
とくぬ衣子猿き入る故帳の内
松く小島くあけきん
そやうに剥くく信を海に花を
生木を植えてはくくあのみ
かくハ袖をまをすけり
悴四子人あえて花き
昔はと衣子く足ゆき熱中を
ゆきハ猿此小猿を引
優婆塞くまはやくく快

五良通篇竹水良通篇涼竹

麻の羽衣千代紙の心山吹 菊

多おぬ二尺の七五三を季の春
薩竹うらまの棋掃の情
鶴うら懐の小口菊さきて
村の地取うらおこす秋形
弘美湯の湧ゆる峰の月
紫をさきおれさ方と核とふ
おれつとぬき盤の里の菊寛く
とあ〜い〜るお根の浅ゆみ
之味縁を境とす〜あ〜と

菊
感水
曾良
薩竹
常波
浪通
友五
泥芹
名菊

はく〜と〜情の欄のぬお〜ら
藤い〜らの情を思ふ流土と兼
鶴あゆま〜に梅うら〜流
お力のおうらうら作の面
号とや情の絶縁鬼よむあ
侍のあを〜と〜や秋の蝶
及の〜ら〜も〜あ〜ら〜ら
半筋のさあおむ花の坂
情の〜情〜も〜ま〜に〜重
性〜情〜重の〜ら〜に〜舟〜た〜ら
破を〜ら〜老の〜け〜ら〜さ
夏〜花〜い〜ふ〜あ〜ら〜お〜は〜ら〜る

菊
通良
水波
菊通
五通
竹菊
波菊

あふさかりにあふさかりのさよ
男多に妹、すれをさるゝ
涙、火、梅、千、鼻、跡、を、ら、す
老、ゆ、け、ハ、針、の、こ、す、の、背、け、る
子、あ、ら、う、の、結、け、さ、ら、う、し、き、さ、ら、や
娘、の、あ、ら、う、茶、碗、二、ハ、さ、ら、を、置、け、
ゆ、さ、ら、み、す、さ、ら、く、旋、き、さ、ら、し、
甲、斐、信、徳、自、身、を、ゆ、さ、ら、う、湯、海、
素、さ、ら、う、さ、ら、う、た、ら、う、和、能、

蜀通五水通良波五

糸、さ、ら、う、梅、さ、ら、う、た、ら、う、の、蘇、桂、

雅良

葉、の、ゆ、さ、ら、う、た、ら、う、さ、ら、う、の、蘇、桂、

蜀

さ、ら、う、の、ゆ、さ、ら、う、の、お、も、い、の、ゆ、さ、ら、う、梅、さ、ら、う、
葉、の、ゆ、さ、ら、う、の、お、も、い、の、ゆ、さ、ら、う、た、ら、う、

蜀
抄丸

さ、ら、う、の、ゆ、さ、ら、う、の、お、も、い、の、ゆ、さ、ら、う、梅、さ、ら、う、
二人、さ、ら、う、の、ゆ、さ、ら、う、の、お、も、い、の、ゆ、さ、ら、う、
裁、物、の、麻、の、ゆ、さ、ら、う、の、お、も、い、の、ゆ、さ、ら、う、

蜀
蘭指
其角
蜀

風を捲くは月のみ
松垣の宮あはれは漢本越の
和歌を抄くは純子相は
篇 足 作

ひよろしと松家けし
草薙うひゆく影の月
篇

木うしと丸宮とまきよ
よむかほはくく雲の足
影のあは里の垣根を
篇 篇 篇

雲の折りあはさるる
よむの初あはれ人の影
みふとくは舟の入り
越人 羽衣 舟泉



